

近畿支部の活動 —若い人との関わり—



辻 幸 一

近畿支部は企業所属会員の割合が高く、分析装置の開発研究、産業分野での応用研究、大学での基礎研究が連携をとれる基盤があります。このような背景のもと、近畿支部では4部構成の「ぶんせき講習会」（基礎編その1、その2、実践編、発展編）を実施しています。なかでも実践編は今年（2017年）で第64回を迎える歴史ある「機器による分析化学講習会」を引き継いだものです。この実践編では企業を訪問しながら講義と最新の装置を使用した実習を受けられるよう企画しており、これまで、堀場製作所、島津製作所、リガクの各社にお世話になり、今年は京都電子工業で開催予定です。

もう一つ、近畿支部で大切にしている事業に「平成夏季セミナー ぶんせき秘帖」があります。昨年は第10回目となる平成夏季セミナーをたつの市国民宿舎赤とんぼ荘で1泊2日の日程で開催しました。学生60名、この会を支えるスタッフとして近畿支部の大学教員や企業関係者も参加し、総勢86名の参加がありました。学生からのポスター発表や企業研究者の講演に加え、もちろん、夜には懇親会が企画され大いに盛り上がりました。このセミナーの目的の一つは普段、話す機会の少ない他大学の学生達が交流を深めることであり、他分野の研究を知ることにより新たな発想を得ることが期待されます。学会としては若手育成という側面もあります。20年先の日本分析化学会を支えるのは、疑いなく、現在学生の彼ら彼女たちです。

ゆとり世代^{うんぬん}と言われますが、私自身は若い方の力を信じています。実際、スポーツや音楽の分野で若い方が大活躍しています。ノーベル賞を受賞するような新しい概念の発見を含め、多くの創造的な活動は20代、30代の若い時期になされています。大学における教員は若い人の感性やアイデアを十分に尊敬しつつ、引っ張り上げる努力が必要でしょう。一方で、新規なアイデアを発想するだけでなく、それを実証し体系化する過程、さらに実用化に持っていくことまでが求められます。これらのプロセスには様々な経験を積んだ方、幅広く学問を学んだ方の助けも必要です。その意味では若い方とベテラン、さらには企業の方と連携しながら研究活動や支部活動を行っていききたいものです。

研究活動を含めたこの世の中の創造活動は自らの生きた証^{あかし}を残す活動と捉えることができると思います。美術館に行けば画家が残した絵画を通じて感動を受けることができます。作家は小説を、映画監督・俳優は映画を、スポーツ選手は記録を残します。企業で働く方も自身が関わった製品やプロジェクトが残ります。分析化学に関わる我々が残せるのは論文や著書^{かか}だと思います。今後、どれだけの論文を執筆できるかわかりませんが、一つ一つ大事にしたいと思います。

〔Kouichi TSUJI, 大阪市立大学大学院工学研究科, 日本分析化学会近畿支部長〕